コンパクト天体への 降着の基礎概念

牧島一夫(まきしま かずお) 東京大学・理学系研究科・名誉教授 東京大学・Kavli数物連携宇宙研究機構・連携研究員 理化学研究所OB

- §1. 星の物理学の復習
- §2. 星と基本物理定数
- §3. 降着現象
- §4. ソフト状態のスペクトル
- §5. ハード状態のスペクトル
- §6. 連星X線パルサー(BXP)

2019/8/19

福山サマースクール

1

§1. 星の物理学の復習

頼るべきものは:

- ・基礎物理学
- ・自分が作った装置から出て来るデータ
- ・想像力

論語より:
 「学びて思わざれば則ち罔(くら)し、
 思いて学ばざれば則ち殆(あやうし)」
 (学而不思則罔、思而不学則殆)



2019/8/19

福山サマースクール

3

1b. 星のビリアル定理

◇ eq.(1.2)式の両辺にrを掛け(積分の代わり)、 $4\pi r^2 dr ~ \tilde{r}$ 積分し、 eq.(1.1)で積分変数を M_r に変換すると…
3V = $\int_0^r (GM_r/r') \times 4\pi \rho r'^2 dr' = \int_0^M (GM_r/r) dM_r ~ …(1.3)$ ここについは空間平均の圧力、V は星の体積。
◇ 古典的ガス圧の場合、 eq.(1.3) 左辺はp=(r-1) u で断熱 指数 r と内部エネルギー密度いに関係づけられるので、 3 V = 3(r-1) < u > V = 3(r-1) UただしU は全内部エネルギー。
◇ eq.(1.3)右辺 (の符合を変えたもの)は自己重力エネルギー $\Psi = - \int_0^M (GM_r/r) dM_r = -(形状因子) \times GM^2/R ~ …(1.4)$ ◇ よってビリアル定理 $-3(r-1)U = -3 V = \Psi \dots (1.5)$ ◇ 全エネルギーは $E = \Psi + U = -(3r-4) U ~ ……(1.6)$ 2019/8/19 福山サマースクール 4 **1***c.* ビリアル定理の教えるところ 自己重力エネルギー Ψ= -3 (*r*-1)*U*=-3*V* ··· (1.5)再 全エネルギー *E*=Ψ+*U*= -(3*r*-4) *U* ····· (1.6)再

- 1. 自己重力エネルギーと熱エネルギーは同程度。太陽では $\tau_{\text{KH}} = |\Psi|/L_{\odot} \sim 2 \times 10^7$ yr は、Kelvin-Helmholtz t.s.
- 2. 星が安定束縛状態にある $\leftrightarrow E < 0 \leftrightarrow 4/3 < \gamma$ が必要。 相対論的ガス($\gamma = 4/3$)は星を形成できない。星内部が 相対論的になったり放射圧が効くと、星は不安定に。 非相対論的でも、内部自由度の多い多原子分子では $\gamma \rightarrow 1$ なので、星は形成できない。
- 3. 星の全粒子数をN₄、M_rで平均した星の温度をT_∗とすると、

 $U = \langle p \rangle V / (\gamma - 1) = N_* k T_* / (\gamma - 1),$ $E = -(3\gamma - 4) U = -(3\gamma - 4) / (\gamma - 1) \times N_* k T_*$

よって星の比熱は負である: *C** = d*E*/d*T** = -(3 γ - 4)/(γ - 1) × *N***k* < 0 …(1.7) 2019/8/19 福山サマースクール 5

1d.「負の比熱」がもつ深い意味

 $C^* \equiv dE/dT_* = -(3\gamma-4)/(\gamma-1) \times N_*k < 0...(1.7)$ 再 $E \equiv \Psi + U = -U = \Psi/2$ (1.5)で $\gamma = 5/3$ -

 1. 星は外界より高温だから熱平衡に近づこうと放射。 しかし *C**<0だから、結果としてかえって*T**上昇。 星が1単位の放射--> 圧力減少-->星が収縮 --> 2単位の|Ψ|が解放され、1単位が放射になり、 残り1単位がUの増分として内部に蓄積。

- 2. 星と外界は熱平衡からより離れる。これが進化の原動力。
- 3. 星のエントロピーは自発的に減少。ただし外界まで合わせ た全エントロピーは増加。熱力学第2法則には抵触しない。
- 4. 負の比熱のお蔭で、本来は不安定な核融合が安定化。
- 5. この性質は星内部が古典的Boltzmann気体で記述される場合に限り成り立つ。電子縮退(Fermi-Dirac gas)や光子放射圧(Bose-Einstein gas)が効くと、星は終末に向かう。

1e. 星の誕生と進化(カッコ内は圧力)



1f. 星の制御パラメータ

◆ 主要なもの

- ・初期質量
- ・進化の度合い(≒年齢)、とくにコアの収縮度

◇副次的な要因 コア温度 T_c∝M_c/R_c

- ・連星系か単独か
- ・化学組成、とくに重元素量 (metallicity)
- ・初期の角運動量
- ・初期の磁場
- *etc.*.

§2. 星と基本物理定数



2019/8/19

福山サマースクール

9

「この章で導いた式には、電子と

2a. 電子に関する3つの「長さ」

1. Bohr半径 $a_{\rm B}=4\pi\epsilon_0\hbar^2/m_{\rm e}e^2=5.29\times10^{-11}$ m \sim Bohrの 量子条件 2. 2. Compton波長 $\lambda_{e} = h/m_{e}c = 2.43 \times 10^{-12}$ m 3. 古典電子半径 r_e=e²/4πε₀m_ec²=2.82×10⁻¹⁶ m m_c²=自己電磁相互作用 これらの比は無次元量になるはず。 エネルギー= $e^2/4\pi\epsilon_0 r_a$ $\cdot \lambda_{e}/a_{\rm B} = (h/m_{e}c) \times (m_{e}c^{2}/4\pi\epsilon_{0}\hbar^{2}) = 2\pi c^{2}/4\pi\epsilon_{0}\hbar c = 2\pi\alpha = 0.046$ • $r_{\rm e}/\lambda_{\rm e} = (e^2/4\pi\epsilon_0 m_{\rm e}c^2) \times (m_{\rm e}c/h) = e^2/4\pi\epsilon_0 hc = \alpha/2\pi = 0.0012$

 $\alpha \equiv e^2/4\pi\epsilon_0\hbar c = 1/137.04$ は微細構造定数で、Sommerfeldが 1916年に分光学の立場で導入。電磁相互作用の強さを表わす。



Niels Bohr, デンマーク、 1885-1962 Arthur Compton

米、1892-1962





Arnold Sommerfeld. ドイツ、 1868-1951

2019/8/19

仁科はニールス・ボーアの下で物理学に開眼



 仁科芳雄 (1890-1951)
 岡山県・里庄(現・浅口市)
 出身、「日本の現代物理学の父」と呼ばれる。理化学研究所をベースに、素粒子、原子核、宇宙線、X線分光、 光子ビームなど広汎な物理学を開拓。Compton散乱の Klein-Nishinaの式を導出。



2019/8/19

福山サマースクール

11

仁科生誕100年記念の国際シンポジウ(1990年,東京)に、コペンハーゲンに あるNiels Bohr 研究所の A. Bohr 博士 (N. Bohrの子息) から寄せられた、 記念講演の一部抜粋。

Nishina, who had come to Europe for studies in 1921, met my father in Cambridge the following year and, in March 1923, wrote to him expressing the wish to study atomic physics in Copenhagen. His chief wish, as he says in the letter, was "to study your theory of spectra and atomic constitution in detail. But if anyone wants assistance in the experiment or the calculations, I should do it with pleasure". As it turned out, he took a leading part in the experiments at the Institute as to various aspects of X-ray spectroscopy. which at that time was contributing so much to atomic theory and opening up new connections to chemistry. Nishina immersed himself in the revolutionary theoretical developments that were taking place in those years in quantum physics. Thus, with the advent of Dirac's theory of the electron, he could immediately, together with Osker Klein, work out the fundamental cross-sections for the scattering of electromagnetic radiation by electron. The correspondence from those years between my father and Nishina shows how much Nishina's participation in the work of the Institute was appreciated. This applies not only to his own work, but also to the help that he was able to give to his colleagues, on the basis of his broad interests and experience combined with his kind and generous personality.

2019/8/19

 $g\left[\frac{h^{*}}{c^{*}}\frac{\partial^{*}}{\partial t}-\sum h^{*}\frac{\partial^{*}}{\partial t_{h}}+m^{*}c^{*}\right]=-2ihc^{*}\left(A_{p},a\right)g \bullet c^{*}g(aH)f c^{*}g(P_{E})$ g= x(Agradg) + Bg(QH) + & g(PE) 仁科博十による、 good { q (Q H)] = grad q (Q H) + 9 grad (Q H) $\Delta(\varphi(QH)) = \Delta \varphi.(QH) + \varphi \Delta(QH) + 2 grad (QH).$ Klein-Nishinaの 9= ve + (Et- (Mr)) H= He He He -iv(t-2) $\frac{\partial \varphi}{\partial t} = \frac{i}{k} E \varphi$ 際の手稿。 grad 9 = - im q $g_{ab}(QH) = -\frac{i\gamma m}{c}(QH) \qquad \frac{\partial(QH)}{\partial F} = i\gamma(QH).$ SQ(QH) = SQ (QH) HE QQAH - 24 V (not and) g(QH) $\frac{\partial^{2}}{\partial t} - \varphi(QH) = \frac{\partial^{2} \varphi}{\partial t} (QH) + \frac{\partial^{2} H}{\partial t} + 2 \frac{\partial \varphi}{\partial t} (QH) + \frac{\partial^{2} H}{\partial t} + 2 \frac{\partial \varphi}{\partial t} (QH)$ $= \frac{1}{c_{1}} \frac{\delta^{2} \varphi}{\delta f_{1}} (\delta H) + \frac{1}{2} \left(\delta \frac{\delta^{2} H}{\delta \delta f_{1}} \right) - 2 \frac{1}{2} \frac{1}{2} E \varphi(\Theta H)$ his (QH)-ha(QQH) = (- mee) (QH) - 2hy (E - (mm)) (QH). \$ (-h=1+ m-c-) (QH) = -p2hv (= - (nmc))(QH) Agrado Y (- WI + mer) g(PE) = - #2LV (E - (mme)g(PE). == #mc)4 a (-bilt+ mai) \$ (Agrad) = - 26 y (E - be me) \$ (Agrad) \$ - + x200 = 2 : d= ne zhv(E-(nm) zihr $= -d \cdot \frac{2kr}{\xi} \left(\frac{E}{c} - (nMC) \right) = -2ih \frac{e^*}{\xi}$ =+ = $: \mathcal{B} = G_2 = K \left(2(\mathcal{P} \mathcal{C} \mathcal{A}) + (\mathcal{Q} \mathcal{H}) \overline{\mathcal{G}} (\mathcal{P} \mathcal{E}) \right)^d$

2019/8/19

福山サマースクール

13

2b. 重力微細構造定数

= 5.9×10-39 = 重力微細構造定数 (2.2)

 ◆ 天体が微少な割合ξ (0<|ξ|<1)だけ電荷中性からズレると、 (自己静電エネ)/|Ψ| ~ξ²(α/α_G)~1.2×10³⁶ξ² ··· (2.3) よって静電<重力となるには、|ξ|<1×10⁻¹⁸ が必要。

eq.(1.4)自己重力エネルギー

2019/8/19



2d. WDのM-R 関係

♦ Fermiエネルギーは $\varepsilon_{F}=P_{F}^{2}/2m_{e}\sim h^{2}n_{e}^{2/3}/2m_{e}$ ◇ 内部エネルギー密度は u=(3/5) n_eε_F~bh²n_e^{5/3}/m_e ◇ 縮退圧は $p_{d}=(\gamma-1) u \sim b' h^2 n_{e}^{5/3}/m_{e}$ bは1のオー ◆ ビリアル定理eq.(1.5)で=p_dとすれば、 ダーの数係数 $(3/5)GM/R \sim -\Psi = 3p_{\rm d}V - -> GM^2/R \sim b''h^2 n_{\rm e}^{5/3} V/m_{\rm e}$ $◇ n_{e}=(M/2m_{o})/V$ (分子の2は陽子と中性子) $◇ V=(4\pi/3)R^{3}$ を 入れて整理すると、数係数は無視して、 $GM^{2}/R \sim h^{2}(M/m_{\rm p})^{5/3}V^{-2/3}/m_{\rm e} \sim h^{2}(M/m_{\rm p})^{5/3}/(m_{\rm e}R^{2})$ $M^{1/3}R \sim h^2 m_{\rm p}^{-5/3} / Gm_{\rm e} \sim m_{\rm p}^{1/3} (h/m_{\rm e}c) (\hbar c/Gm_{\rm p}^2)$ $M^{1/3}R \sim m_{\rm p}^{1/3} \lambda_{\rm e} / \alpha_{\rm G}$ $R \sim \lambda_{e} (M/m_{p})^{-1/3} / \alpha_{G} \sim 0.01 R_{\odot} (M/M_{\odot})^{-1/3} ... (2.4)$ ♦ WDの半径はR~0.01 R_☉で地球なみ、しかも重いほど小さい。 ミクロな世界の関係が α_{G} により、巨大な天体のM-R関係になる。 福山サマースクール 2019/8/19 16

2e. さまざまな星

- I. 惑星(M<10⁻³ M_☉):地上の固体と同様、おもにクーロン反発力で 支えらる。粒子間隔~a_B、密度ほぼ一定なのでR∝M^{+1/3}。
- BD (~10⁻³M_☉<0.08M_☉): 重力収縮するが水素核融合に点火せず、 電子の縮退圧で支えられる。粒子間隔~λ_eでR∝M^{-1/3}
- 恒星 (0.08~10²M_☉): 核融合で発熱し、古典ガス圧で支えられる。
 C*<0で、真の意味の「活きた星」。Mが小さすぎると電子縮退 圧が効きBDに、Mが大きすぎると放射圧が効き不安定に。
- 4. WS:初期質量<8 M_{\odot} の恒星が進化、中心部が収縮、電子縮退圧 が効き核融合停止、外層は放出され惑星状星雲に。電子:核子=1:2 なので、同じMのBD(~1:1.2) に比べ、Rがやや小さいが、他の性 質は似る。 ϵ_{F} が超相対論的になるとMの上限 $\sim m_{D} \alpha_{G}^{-2/3} \sim 1.4 M_{\odot}$
- 5. NS:初期質量8~20Mの恒星が進化、中心部が潰れ重力崩壊型 超新星爆発で生成。核子縮退圧で支えられる。半径はWDに比べ ~m。/m。~10⁻³。M-R関係や上限質量はWDの場合に準じるが、 一般相対論と核力が加わるので複雑。観測的にM=1.4±0.3M。
- BH:NSの上限質量を越えた場合に生じる。初期質量>20M_☉の 恒星の末路とされるが、できかたは未知の部分が大。重力波観測 では30~80M_☉のBHが多数で、その起源は未知。

2019/8/19

福山サマースクール

17

2f. NSの*M*-R 関係

WDの場合、

 $R \sim \lambda_{e} (M/m_{p})^{-1/3}/\alpha_{G} \sim 0.01 R_{\odot} (M/M_{\odot})^{-1/3...}$ (2.4) だった。NSの場合は、縮退するのは電子ではなく核子な ので、 λ_{e} を核子コンプトン波長 $\lambda_{p} = h/m_{p}c$ に置き換えれ ばよい。よって同じ質量の場合、

NSの半径はWDの半径の約*m*_e/*m*_p=1/1840倍 を得る。

より詳しく核子と電子の数比なども考慮すると、

R_{NS}/R_{wd}~ 1/600 (ただし同じ質量で比較) ·· (2.5) これより R_{NS}~0.01 R_☉/600~10 km 2g. 重力エネルギー vs. 核エネルギー これらは宇宙のニ大エネルギー源だが、性質は大きく異なる。 《核エネルギー》

- ・天体表面or内部の核反応で核子1コあたり解放されるエネ ルギーは、*E*_n~MeVで、ほとんど環境に依存しない。
- ・ 質量Mの物質のもつ核エネルギー∝M で、これは核力が 短距離力だから。
 ▲ Schwarzschild半径

《重力エネルギー》

- ・核子1コを無限遠から大体表面まで物質を落下させた時に 解放されるエネルギーは $E_g=GMm_p/R$ 、BHに落下させると、 $E_q\sim (1/12)GMm_p/(2GM/c^2)\sim 0.1 m_pc^2\sim 100 \text{ MeV}$
- 自己重力エネルギーはeq.(1.4)より|Ψ|∝M² (if R=一定)、
 or |Ψ|∝M^{5/3}(if ρ=一定)。質量に1乗より強く依存する、
 極めて特異なエネルギー。これは重力が長距離力だから。

2019/8/19

福山サマースクール

19

2h. 重力現象と核物理現象

	質量 <i>M</i> (<i>M</i> _☉)	半径 <i>R</i> (<i>R</i> _☉)	Eg	<i>E</i> _n	E_{g}/E_{n}
星	0.08~100	~(<i>M</i> / <i>M</i> _☉) ^{0.7}	~1 keV		~10-3
WD	0.1~1.4	~0.01× (<i>M</i> / <i>M</i> _©) ^{-1/3}	~0.1 MeV	~MeV	~0.1
NS	~1.4	~2×10 ⁻⁵	~200 MeV		~10 ²

- 星:当初、太陽のエネルギー源は重力と思われたが、放射を賄える 期間は§1cのKelvin-Helmholtz 時定数で、*τ*_{KH}~2×10⁷ yr。 Charles Darwinは「地球の年齢はもっと長いはず」と反論。 後に、3桁多い核エネルギーが恒星のエネルギー源と判明。
- WD:降着現象 (e.g.,<mark>矮新星</mark>)と核反応現象 (e.g., 古典新星)が拮抗 して観測され、エネルギー源が区別しづらい。
- NS:一般に降着現象が核反応現象より卓越。しかし降着する弱磁場NS (LMXB)の表面で起きるX線バーストは、核反応起源。

§3. 降着現象

- ・ 質量の供給方法 Roche lobe overflow、星風捕獲 星間ガスの捕獲など
- ・降着流の流体力学 角運動量輸送とエネルギー収支
- ・電磁放射とX線スペクトル

2019/8/19

福山サマースクール

21

3a. ケプラー運動

- 多粒子相互作用(圧力,粘性,放射etc.)を無視すれば、
 降着物質は、中心天体を焦点の1つとする楕円上を
 運動する(ケプラー運動)。
- ・ 軌道の形状は幾何学的には、軌道長半径 a と離心率
 e を与えると決定できる。
- 物理的な保存量は、力学的エネルギー *E* (⇔時間の 一様性) と角運動量*L* (⇔空間の等方性)の2つ。
- (*a*,*e*) ↔ (*E*, *L*) の対応関係。*a* ∝ |*E*| で、*a* or *E* が同じなら、*L*が大なほど*e* が小さく、よって軌道は丸い。一般に降着物質は大きな*L*をもつと期待されるので、降着流は円軌道に近い形をとる。



3b. 角運動量とエネルギーの引き抜き



3c. 角運動量の輸送

降着流のEは放射として捨てられるが、Lはずっと捨てにくく、 おもに以下の過程に限られる。

- 中心天体が強磁場をもつ場合は、磁場を介して中心天体に トルクを及ぼすことで、角運動量を捨てる (==>§6)。
- 2. 粘性により、降着流が、後続の降着流の一部に L を渡す ことで、外向きにL輸送。アウトフローなども形成される。



2019/8/19

福山サマースクール

25

3d. 磁気回転不安定性 (MRI)

特に有効な L の輸送過程が、拡張された粘性とも言うべき、 磁気回転不安定性 (MRI; Hawley & Balbus, ApJ 376, 223, 1991)。
中心 天体・
降着流の内側Aと外側 Bを磁力線(緑)が結ぶ。
磁力線は降着流 に凍結され回転。
角速度の差でAが 先行しBは遅れる。
磁力線の張力は θ 方向にAを減速(Bを加速)させる。結果 的にA (B) は全エネルギー E を減らし(増やし)、ビリアル 定理eq.(3.1)により重力ポテンシャルΨ =2E も減少(増加)。 よってAは落下し (Bは半径を増やし)、かつ角速度も増大 (減少)。BはAよりさらに遅れ、磁力線はますます伸長。

3e. 標準降着円盤

◆ L の輸送は無視、 Eの変化にのみ着目。降着物質は平たい 円盤を形成、ケプラー回転しつつゆっくり落下と仮定。

◆ 質量 △ *m*が △ *t*の間に半径方向に- △ *r* < 0 だけ落下。
 △ Ψ = △ (-*GM* △ *m*/*r*) = - △ *r* · *GM* △ *m*/*r*²

◆ この∆Eが、半径 r で動径方向の幅∆r をもつ円環の表裏 面から黒体放射されたとすると、Stefan=Boltzimannの定 数をσ、円盤の温度をT(r)として、

 $2 \times 2\pi r \,\Delta r \cdot \sigma \,T(r)^4 \cdot \Delta t = \frac{1}{2} \Delta r \cdot GM\Delta m/r^2$ $T(r)^4 = (GM/8\pi\sigma r^3) \,M_{dot} \qquad \dots (3.2)$

2019/8/19

福山サマースクール

27

 $T(r)^4 = (GM/8\pi\sigma r^3) M_{dot} \cdots (3.2)$

◆ 円盤のローカル温度は、 *T(r)∝r^{-3/4}* で中心に向け上昇。
 ◆ eq.(3.2)に円盤表裏の面積要素 4πr drを掛け、ある内縁
 半径*R*_{in}から無限遠までrで積分すると、円盤の放射光度は

 $L_{x} = \int \sigma T^{4} 4\pi r \, dr = \frac{1}{2} \left(GMM_{dot} \right) \int dr/r^{2}$ = $GMM_{dot}/2R_{in}$...(3.3)

◆ これは無限遠から質量降着がレートM_{dot}で起きているとき、 単位時間にR_{in}までに解放される|Ψ|の半分。残り半分は、 R_{in}でのケプラー回転の運動エネルギーとして蓄えられる。

 ◆ eq.(3.3)の因子GMM_{dot}をeq.(3.2)を用いて消すと、 Stefan=Boltzmannの法則そっくりの関係式が得られる: $L_x = 8\pi\sigma R_{in}^3 T_{in}^4 / 2R_{in} = 4\pi R_{in}^2 \sigma T_{in}^4 \cdots$ (3.4) ただし T(R_{in})=T_{in}とした。

2019/8/19

福山サマースクール

28

3f. Eddington限界光度

- ◆ Vを貫く光子の外向き運動量フラックスL_x/4π r²c のうち、 Thomsonの光学的厚みV n_e Σ_Tを掛けた分だけが放射圧と して働く。 Σ_T = (8π/3)r_e² =6.65×10⁻²⁹ m²(3.5) はThomson散乱の断面積。よって光子の外向き放射圧は F_{rad}= (Vn_e Σ_T)(L_x/4π r²c)
- ◆ 力の釣合い $F_{rad} = F_G$ とし、両辺に共通なV/r²を除去すると、
 $n_e \Sigma_T L_x / 4 \pi c = GM (n_N m_p)$
- ◆ これよりEddington限界光度は、n_N/n_e~1.2として L_{Edd}=(4π GMm_pc)(n_N/n_e)/Σ_T~1.5×10³¹ (M/M_☉) W ...(3.6)

2019/8/19

福山サマースクール

29





4b. 二種類の「熱的放射」

《温度Tで光学的に薄いプラズマ放射》

- 1. 放射の自己吸収は起こらないと仮定。
- 2. 連続成分は、電子がイオンで曲げられる際の制動放射。 さまざまなイオンの輝線を伴う。
- 3. 放射源体積をV、電子密度 n_{e} 、イオン密度 n_{i} とすれば、 エネルギーフラックスは電子のMaxwell分布を反映し、 $\propto (Vn_{e}n_{i}) \cdot (h\nu)^{-0.4} \exp(-h\nu/kT) \cdot d\nu$

《温度Tで光学的に厚い物体の黒体放射》

- 1. 放射と物体は熱平衡にあり、自己吸収が完全に効くと仮定。
- 2. 放射過程は問わず、輝線も吸収線もない。
- 放射表面積をS、Stefan=Boltzmann定数をσとすれば エネルギーフラックスは

```
\propto S \cdot (h\nu)^{+3} / \{\exp(h\nu/kT)^{-1}\} \cdot d\nu
```

2019/8/19



4c. 多温度黒体放射(MCD) モデル



Mitsuda *et al. PASJ* **36**, 741 (1984) Makishima *et al. ApJ* **308**, 635 (1986)

標準降着円盤の温度勾配eq. (3.2) T(r)∝r^{-3/4}を仮定し、 温度 0~T_{in}の黒体放射スペク トルを、円環面積の重みで加 算したもの。観測スペクトル の横軸位置からT_{in}が、(距離 がわかれば) 縦軸位置からR_{in} が、推定できる。



2019/8/19

4d. 観測との比較(NSの場合)

 $L_x>0.3 L_{Edd}$ の時、LMXB(質量降着する弱磁場NS)のスペクトルは、 T_{in} ~1 keVで R_{in} ~10 km のMCDと、 T_{bb} ~2.2 keVで R_{bb} <5 km のBBの和として良く表現でき、ビリアル定理の予言どおり、これら2成分の光度はほぼ等しい。





2019/8/19

4e. 観測との比較(BHの場合)

Makishima *et al.* (1986)(§4d)「てんま」衛星で得られたBH連 星GX 339-4のスペクトルは、*T_{in}=0.7~0.8* keVのMCDモデル とhard tailの和でよく再現。標準降着円盤 が確かに存在する。

Takizawa (1992) 「ぎんが」衛星で観 測した BH新星 GS 200+25では、X線 光度が3桁も変化したが、*R*_{in}の値は極 めて一定に保たれた。*R*_{in}は物理的に意 味をもち、最終安定軌道を表わすようだ。

Ebisawa *et al.* (1993) 「ぎんが」で観 測した大マゼラン雲のBH連星 LMC X-3では、*R*_{in}の値は、~7 *M*₀のBHの 最終安定軌道半径に無矛盾。



2019/8/19

福山サマースクール

37



2019/8/19

福山サマースクール

38



2019/8/19

福山サマースクール

39

4g. BH質量/スピンの推定

Makishima et al. ApJ 535, 632 (2000): 「あすか」の結果



2019/8/19



5a. 降着流の2つの安定状態











2019/8/19





5f. 熱的コンプトン散乱

- ◆ コンプトン散乱:光子と自由電子の基本的な相互作用。

電子温度 T_e をもつ熱的プラズマに光子が 入射、複数回の散乱の後、逃げ出す。 $\Leftrightarrow h\nu \gg T_e$:光子はエネ損失、電子は加熱。



2019/8/19

福山サマースクール

48



5h. コンプトン散乱の統一的整理

さまざまな天体で観測される熱的コンプトン放射を、 $Q \ge \tau$ で整理できるのでは? (Makishima 2014)。





6a. BXPの降着円筒からのX線



2019/8/19

6b. BXPの特徴的な3つの半径

- 「星風粒子の運動エネルギーく重力ポテンシャル」と なり星風が捕獲できる、重力圏の半径 (Bondi半径): 主星からの星風の速度をw とすると、 r_B~3.7×10¹⁰ (w/10³km/s)⁻² cm (6.1)
- 「内向きの重力<NS磁場による外向きの力」となる磁気 圏の半径 (Alfven半径):磁気モーメントμ∝BR³を用い r_A ~ 4×10⁸ (L_x/10³⁷)^{-2/7} (μ/10³⁰)^{4/7} × (R_{NS}/10km)^{-2/7}(M_{NS}/1.4M_☉)^{-1/7} cm (6.2)
- 3. 「降着物質のKepler角速度 ω_{K} =NSの自転角速度 Ω_{NS} 」と なる共回転半径:NSの自転周期を $P = 2\pi/\omega_{\text{K}}$ とすると、 $r_{\text{c}} = (GM_{\text{NS}}/4\pi)^{1/3} P^{2/3} = 1.7 \times 10^8 P(\text{sec})^{2/3} \text{ cm}$(6.3)

```
2019/8/19 福山サマースクール 53
```





2019/8/19

福山サマースクール

55



6g. 4U 1626-67を用いた検証 Takagi+16, PASJ 68S, 13

P=7.6 sec, B=4×10¹² G、 L_x =1×10³⁷ erg/s, D~8 kpc のBXP. 例外的に、低質量星との連星系。星風捕獲ではなく、 Roche-lobe overflow+降着円盤。MAXI長期モニタ+文献値。

- ◆ 右図データ点の傾きは、トルクに 対するPdotの応答を表わす。ここ から慣性モーメント ∝*M*_{NS}*R*_{NS}²が わかり、上で求めた*R*_{NS}を用いて *M*_{NS}=1.3±0.3 *M*_○
- ◆ GL79の較正に成功、NSのM-R間 系を測る新方法が開発できた。

元で¹⁹3年171年17 2019/8/19

6i. X Persei

Yatabe+18, PASJ 70, 89;谷田部ほか天文月報(10月号?)

- ◆ P=835sの長いパルス周期とL_x=4e35 erg/s という低光度をもつ、 近傍 (D=0.81 kpc; Gaiaから)の特異なBXP. MAXIで長期モニタ。
- ◆ Spin up/downを繰り返すので、ほぼトルク平衡。L_xの低さを割 引いても、長いPを説明するにはB~10¹⁴Gが必要 (左図)。初めて の連星中のマグネターの発見かもしれない。
- ◆ GL79モデル[eq.(6.4)]は、M=(1.86-2.20) M_☉を示唆 (右図)。 マグネターは1.4M_☉より大きな質量をもつかもしれない!

